

9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4



陸奥衡 合一冊

卷一、二、三  
十七年までを欠く

元禄十年跋

秋部  
甲斐お序ありて終る  
時より後ひりて出でまつた  
毛彦階子けきりくらあわくと  
輪より車も筋 翁の蘿  
健持の孫まろもくやもと  
己ノ膝よりりて角力取  
格子やね子臨門小松よし  
化物て身をもつて言ふに  
寒玉

六

一語のまゝあらへん。お津厂

丑角

貢川（よこがわ） まづりきの角力取

岩翁

菊の鳥ねぐらの竹の日ハいつと

風調

等や芝居あつちの舞之才

志言

御のと音ふもと

宵

さくらさくらむらで梅蝶

蛙歌

通ひやうれめの脚ぶり

尺竹

暁の毛確——遠からいとト

京  
棹歌

如行きゆるく。

菊のまゝやうながす河の園

芝柏

セナや戸隠よえと木よと

荆口

梅妻や誰か月か雪か雲に入

山夕

さくられいは書くわ星と月

下（さか） 草下

草花のう湯や草花の水行

全

水魚

山木のゆくらの花や山木の花

信徳

木屋のし小野や山木の花

公山  
許

木屋のいてや山木と力抜

利

嫁のいてや山木と力抜

禮堂

豊潤ゆき掌すまほひのよ

承雪

あきやうての角を發づ揚テ投

照

卧高

漁翁よ出くま縄もく芦わや

鶴

醉

と根お波枝が川てゆくよ

馬耳

二日酔よみやお絆の事よ亨

不穢

さくはいゆすくはるく松の言

不誠

まくまくの眼

等芳

草原や竹林へとまろ馬車

鬱子

一ノ山よ山よ山よあきよや

宍月

経典や仰ちやうよし物書

奉白

セタや中のよもやち真賣

冬市

子一つやふりやにせセタ

神奴

瞿夜よかよかとんじぬ花

海生

鷦鷯よ鳥よ鳥よ鳥よ三西よ

後引其并

せふよひくよかよかよひく

桃鄰

匂川のよしみねくわこの色

冬市

障へぬ敷はづくく早よふ

う安

もよよぬぬとキシムヒシキ佛

か噲

七十お腰も反らひやまへれ

其角

靈廟の匂川がす氣、れ

獅原  
妻翁

おれや 桟よ船のあくあくわ

肩  
重行

あくいふをよみがえりまつこまづ

三耳双  
鞆

橋まちうらに上て呪也

三耳双  
鞆

ゆめや まく座してわの事

避酒

衣松まかき向こへ一の庵

意子

船よど一 構は廻るやまかま

嵐雪

まくつやくさやまくさの江

九梅

剝宅

お身や 剥てくやうの緒の側  
お身や 全くくいふお内の方  
お身や おののつづくやうの月  
寝子

絶食とくまゆ

お身や おねを書たりとお月  
お身や お身や 頭たと入  
お身や お身や 小町下  
お身や お身や 犬の氣  
お身や お身や 犬の氣

まむすむとあらん月の人の事  
相志

神樂園

名力や折もあらよはれ  
名月の夜に照りて鳥か  
轍士

深川指月巻

名月や多き羽月日よい下  
波月や林も年 め難の辰  
月月ややまとつて一人を  
千川

羽月やあさりかわ月

利牛

名月や投宣と草めど

孤星

とふんかなくねむ月め月アリ

利令

後庭アリサル事浦月アリ

葉次  
立桑

床小え清々と音中やうの月

巨亭

芭蕉卷

あらむと豆腐好むとまお月

桐实

金糸ちるやかく食ひ月アリ

芝足

おしよ新實お月アリ

貝浦

納屋の火の丁子月アリ

万巻

名月や、きのまめりいのう  
茅みぬぬの海より傳ひるの月  
名月の底やほのかな序  
約後り猿の声漏れ未だ  
不顧

山家

はす／＼よ絵／＼あ／＼すの用  
海／＼ア／＼人／＼ん／＼の月  
寢顎／＼を／＼す／＼月  
す／＼か／＼繩／＼す／＼月  
子璣

同

情吟の手解／＼す／＼月  
あ／＼と牛痴／＼麻／＼の月  
名月や海へ断／＼ニ保／＼る  
名月や／＼も／＼ミ／＼ミケ一  
名月や／＼も／＼海めに海  
空りや今宵ニ月ひをやせ  
此の空／＼も／＼月  
終たのちかくや／＼月  
月と育てたま／＼ややく

蓋

鶴  
翫

名前は近ひやまちのよのま 每倫  
白鷺や蓑衣股や」に後日月 其角  
懐の宿も本まき」ほの月 秋色  
東向へあすらん月の葉がえツヤ 佔徳  
宿金へゆづみのと後日月 龍鬚  
宿銀や牧遠もたきて後日月 圓泉  
味噌など一粒のみも後日月 耳弁  
糸おまきや白粉若おれかみ 未陌  
糸や本の糸のせ一不麻雲 竜重  
去むを發とうらで糸おる 举白  
革持ひ處りいそあ志を成む 畠長山  
二ノあそ一ノ絆一糸おる 俊峰  
四「本男もうらと頭られ 大夜 流斐  
糸お酒葡萄の壳はるひり 耳弁  
桔梗の近はくわのほひト 俊峰  
移書おぬめや今と雲のよ 蓬山  
岳山のよ味にくわのタト 崇列 水晏  
お行革之を腰うてどうひる 調武

江戸

日ひあひきみるくやゆく  
九月、日之終ノ次

夜の音と箱根の葉の雪、  
渺々

西行

かみ殿宮強し、極力もよ  
櫻井

宿舎

り所や七里が原より八里往 同

日向

結音もあらず、拂ひ候あらむ

同

竹林も下らず、沈々タ一づれ

羽黒山

裏

冷もとれず、少ありてとくよふ松

同

鈴の音もくさむまことにわづ

同

さうの音もやいそんかゆも

同

麻子の音もくさむまことにわづ

同

途中吟

すきはよ野、三深め事より  
雲根

同

愁

島

壬午年九月

白い鳥の羽の鶴の草とて彌トド

言水

紫の木や角振扇子蝦牛

那鄰

大刀やぬこりに小舟の舟

山形何云

初ね

初よおきす扇の扇の扇の扇

うせ

曉砧

夕れども扇あらひけ隣れ

同

暮生の全やに相の一草ト冬菊

暮よれのとあくめ一草ト

暮冬や底よ素人の歌本波

不眉

新よまよやもともと藤儀

後秋

古い歌よ兩の娘の代え菊

其角

セアやけ中入やう鶴おを

蘭水

柳葉やうへる扇あお着雲

臨江

南あた雲棚舟を若ナレ

介我

秋部終

元祿九丙子  
十月十二日 翁三回

今更お袖をうちひや タトの音 桃隣  
緯、夜ぬ醉和 さとをき比 岩雪  
水窓を波打ひまくお津て 素堂  
娘子をのむ 宅あがつま 神叔  
市郎機ふ徳あそくはま 一  
乳川離す兒をうめにき 東潮  
旅好きぬるほゆく遊ぶん 素秋  
軒、うきと川へ葉がす 松風

ノウ

四

李下

永雨の雲の城の邊従  
一理尼は、火神侍

仙化

は眼の様嬪と金和巾紙

琴風

楊と禡ノ音ヒヒと櫻

林也

下音ノ子伝へ近道

李里

桜ノ葉ノ中真ゑ

桃舟

夕涼机和ノ枝

桃明

小僧寺の跡宿の江湖寮

全峯

白い猿梗の絶句

素手の塔ノ月や胡

林也

鷺立の名ノ衣笠の腕

琴風

照風の紅葉の扇

大津口

涙襟の床ノ色の扇

桃隣

羽扇子蝶を移入鹿せ

東潮

うづく声とかく火文字

素秋

初がと赤へと深か

神叔

吉砂の金糸を以て泊

湘

李下

二

月移中ちむ市へ告乃跡  
まみゑのれと誰々え捨  
去ゑ了詔書<sup>イナカ</sup>空<sup>アモリ</sup>伊今浦  
刻ム佛の辱<sup>スルテ</sup>蒙<sup>マツル</sup>金峯  
見初<sup>スル</sup>肥<sup>シキ</sup>内白鳥  
桃隣  
信をもれど、秋<sup>ノ</sup>春行林也  
待<sup>ム</sup>皆<sup>モ</sup>  
経年<sup>の</sup>見<sup>ム</sup>じこい波<sup>タ</sup>潮  
獨<sup>モ</sup>事<sup>リ</sup>多<sup>シ</sup>り<sup>ク</sup>あす<sup>モ</sup>少<sup>シ</sup>哉<sup>モ</sup>  
其<sup>ウ</sup>情<sup>け</sup>ゆきよ<sup>ム</sup>者<sup>モ</sup>テ可<sup>シ</sup>御<sup>フ</sup>神<sup>シ</sup>叔<sup>シ</sup>  
流<sup>ム</sup>川<sup>の</sup>中<sup>の</sup>波<sup>タ</sup>泉<sup>タ</sup>桃隣  
赤<sup>キ</sup>實<sup>は</sup>は事<sup>ム</sup>やあ<sup>ム</sup>ん<sup>モ</sup>蔓<sup>タ</sup>嵐<sup>タ</sup>雪<sup>タ</sup>  
一<sup>代</sup>ノ<sup>ハ</sup>よ<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>遠<sup>シ</sup>隨<sup>シ</sup>東<sup>シ</sup>潮<sup>タ</sup>  
鼻<sup>ム</sup>鳥<sup>子</sup>時<sup>ム</sup>猿<sup>シ</sup>アラカ<sup>ハ</sup>の向<sup>タ</sup>素<sup>シ</sup>秋<sup>タ</sup>  
霜<sup>ム</sup>ノ<sup>ハ</sup>う<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>澤<sup>タ</sup>波<sup>タ</sup>病<sup>タ</sup>李<sup>タ</sup>下<sup>タ</sup>  
いづか<sup>ハ</sup>遠<sup>シ</sup>の腰<sup>ム</sup>緑<sup>タ</sup>手<sup>タ</sup>琴<sup>タ</sup>風<sup>タ</sup>  
唐<sup>タ</sup>庭<sup>タ</sup>範<sup>タ</sup>を免<sup>シ</sup>押<sup>シ</sup>合<sup>タ</sup>扣<sup>シ</sup>風<sup>タ</sup>

末聞く接へましもとひ市

桃隣

父風の櫨カドをアス え、母

琴風

聲の階ハシ四十四のわく

湖松

大キカニとえめの敵ヒツクのす

素里

一章の立事タチは空アムくよむ何

嵐雪

松マツの新シニふ竹タケノイ 実ミツ冰花

嵐花

連衆拾九人

四 桃隣

四 崑雪

壹イチ素堂

三ミツ李子

李子

三ミツ林风

林风

四 桃風

李星

三ミツ全峯

全峯

三ミツ仙化

仙化

三ミツ東湖

東湖

三ミツ米光

米光

芭蕉三回追悼獨鑑

桃隣

吉香ノ霜をふケテナリ長慶寺

山氣霞の楓アクラ緑モク青シオ灰

三ミツあ琴アハラと胡ガム坐シタかへのをく

絶ハシしわ肩カミ（ ）志シの空アム

物モノアヒテ口ヒテと高タカれり

井イシ古コトが三ミツ歌ウタく鶯鳴

二ニ川カワ多タメてうとういにほれ月

極ハシしつ切カツくぶス 菊泰

ウ

お刹ノ後笠遣枯れ風

ゆりぬ仕事おうら風の聲

火焚めはとこりきり伐もと

會もとそそわ立自立自

生得アトツキ歎タラハシげんを利足

鼻アリもくもく長崎の雲

鴉アヒ味ねッアヒね浦のよ緑

浮アヒよアヒよアヒす

勝アヒお春アヒニ青アヒし作アヒれ

もやアヒくと踊アヒきやく

月アヒもアヒもアヒもアヒ也アヒ城至肩

扇アヒもアヒもアヒ、端アヒ脚アヒの衣アヒ

作りアヒもアヒもアヒ也アヒ、織アヒ物アヒの衣アヒ

庵アヒとアヒもアヒもアヒ也アヒ勤アヒ小

見アヒもアヒもアヒ思アヒもアヒもアヒ也アヒ食アヒ

松アヒもアヒもアヒよい太アヒやわ

み七日落アヒあアヒてゆアヒめぬ

隣アヒもアヒすアヒとアヒおもアヒなれ

二

五

源氏川は丹後守の入主り  
身も心も病氣アラシキへども、腹痛  
日眩ヒタツのもや熱ヒヤクとも食慾無  
まつともやめらの事ハシマツ——やま夜  
探ミサホたる人のアリ——絶アラカツ  
死マリのれづれとあらわす  
遙アリノ双ツツ軒カヌイを賣アリ仕事  
糸疏アリ——おス姐アリの腸  
まゝの月光の心空アリし  
豊浦アリのふうよき川アリ  
ナアリ本店アリありまつりて初次アリ  
長嶺アリトアリあらじとそしとハ立アリ  
沙アリめ姫アリゆアリ一萬アリ二十枚  
酒アリ二万アリとそこ處アリ新嘗アリ  
嫁アリかとしまとちとあゆるアリ  
船町アリ底アリ扇アリをあん  
百萬アリ外アリ立アリ六百アリ用アリ  
およアリえりと名アリ仙臺アリ

人參て清め 命を捨て乍  
唯あゆくとあくまよ  
走らむる間ミヤツの得タチかよくとれ  
あたふよすすりとまよは  
門須ス庵モツツおとと義

三 海雲ミツツとまよる跡シテの古シテ  
此ハシマと下シタマてきよまよる雲シマの  
空アカシとりまよる皆ミタマの山

經キヨ成シテ就スル一ヒ呵ラ行ハシマ

活ハラ艸ハラが筒ハラ也ハラ序シテ意シテを慕ハラ  
活ハラ仕ハラしハラしハラしハラれハラセハラヌハラ  
却ハラ移ハラアハラハハラ金ハラもハラ小ハラ  
末ハラ初ハラアハラ府ハラのハラがハラ無ハラ  
け衣ハラ立ハラ高ハラ一ヒ丈ハラのハラち  
こざハラとハラ無ハラ拂ハラもハラ極ハラ  
舛ハラ人ハラりハラぬ喜ハラ又ハラ入ハラ大ハラ故ハラ  
脚ハラやハラ蹴ハラりハラ身ハラ義ハラ脩ハラ身ハラ  
度ハラうハラ身ハラてハラ身ハラ脚ハラ

匂氣をもる脣シラヌの上アマに  
杜ツバキ祥ギの下シタ御ミササギの房カニカマ  
ミツ天アメニ八ハチ月ツキ所シテえん馬マサニ森ミヤシマ  
渴スル島シマ門モン一イチ後アフタく山ヤマの田タケ  
達タマリ節シテ白シロ糸スレ綿ヒダラの毛ウ一イチ毛ウ  
凡オホ核カコ祖シロおシロ紀ヒ唐カタマリ  
世ヨリあリ衣アガシあリれリうリなナよヨうウすス  
後アフタ汗アヒ汗アヒ酒サケ酒サケ子コノ  
一イチ頭カブ元ハタケ一イチ漢カタマリ多タマリ郭カマリ  
端カタマリ地ジ書シテ袋サカナ一イチ革カタマリ  
傾カタマリ城シテ也シテ纏シテ一イチ作シテ御ミササギ鉢ハチ  
大オホ粒カタマリ也シテ細シテ一イチ作シテ鉢ハチ  
多タマリ内シテ郭カマリをシテ坐シテ化シテ作シテ小コノ月ツキ  
令シテ限シテとシテ以シテかシテ内シテ化シテハ室ハシマ  
和シテとシテ不シテ可シテとシテ近シテ急シテ後アフタ  
遠シテ也シテ不シテ可シテとシテ近シテ急シテ後アフタ  
海シマ波シマよシテ賊シロ人ヒトあリ呼シテる  
事シテの終シテ自シテよシテ唐カタマリの

あけのみゆびのまな竈のと  
役去ぬ内乃えル佛壇  
せ季候の候も候りむ在る  
うち集へニ里御の通  
主御かくす御まわらとおがみ立  
自らももわざこやうね  
まくと待てよほきうきくわ  
浦池荒坂の中ぬ舞タテ  
近きをよいもふれの月  
相對げりこゑう世人  
ぬめがナハあく明難  
路シキにまくもあく腰  
あくやくと愁うう不動院  
寺トモ第一廟含ス美譽  
ゆうて作る爲エラ務め食  
げくらむたりゆる筆  
ぬまうむほきとりよせりあらうる  
ねうのまちゆび障テよ

詠詠の匂いと年めあひて  
ニツキをもとめし 桃花薔

亡友毛直氏と其の集の  
仰仰とぞれども  
追跡よに集と傳傳と  
もよ。

あくまきとやあくまきの

とよか集

美堂

於別墅鳥居氏興行

海潮の音とさざなわくよ

追跡とれ 轉コトハル麻の子

舞富士宮の重きよすが毒

とすみとおせじより月の宵闇

又移れ 頬駕コトハの竹

立六人唐松園よ養生と色

戸植コトハの桂 一庚申のれ

桃舟

桃隣

湖松

桃隣

桃舟

桃明

湖松

ま見のまくはる十文字

桃明

日和のまくわんのまく

桃洞

裏込の裏とまゆり

桃

湖松

宮め左の石をまく

桃明

冷ふの煙を降る井戸の蓋

桃舟

おとすも二すとまく

桃洞

相手峰の病ひ草薙

桃洞

山の雪に足りぬわ月夜

桃明

ゑれうやれし皆とまく

桃舟

駒馬ス御侍乃ニ番生

湖松

者のおもへ脇と突

桃洞

禁きお法と曰まく

桃隣

淀の杜舟やば川の水

桃明

猫ねずみれつ先づまく玉

桃舟

瞽女のもく城あみ城

湖松

通じ塗てよど縁ノ用

桃隣

まきの春はるにわらふ

桃明

船三とくも、庄ひるい草

桃舟

雨程（レニ）達也（タマヤ）等艸

陶松

タマレバシ（タマレバシ）と飼本（ヒムツ）

桃洞

鎧流馬（アザメイ）や五郎鷦（ウラハシ）

桃舟

目（メテ）よ舞（モカ）踏（ハシ）立（タチ）

桃明

四十（シブシ）年（リサ）幼（ヒトコト）会（タチ）も又（アリ）

桃障

千石（チリロク）坐（スル）こ石（シロ）お株（シロツル）

湖松

羽二重（ヒタフシ）の先（アヘン）味（ミカゲ）。

春衣（ハナエ）

毒（ハラス）トモトモ

草

下毛芭蕉はうりよ宿（スル）て銀（シル）の  
草（シロ）とあらひ田社（タノマツ）終（シテ）川（カワ）と  
の（の）ん（ノン）子（コ）と參（シテ）國（クニ）

うち御（ミササギ）の相（シテ）年（ヒツ）とく（シテ）

竹（タケ）

ぬれゆきほゆよ心（ハ）づ藤衣（フジイ）

桃障

素（ハ）とくわあくひよし女（ヒヨシメ）

等（タメ）

遣持あらわきを虎ややあさん

助雙

白のの雪に細る

あかく黒くやうつと絶え

全

まよち船ぬへもよみゆく

桃隣

葉、ちゆそよ、部の紹鳥

寺躬

對兩雅

折りはくくすの蔵主

全

石筋づかく龜のとどか

助雙

鳥の自亨のゆ陽のアサヒ

桃隣

鋤立上京飼行の巻雜波園女判手

一之徳食さうる御州多客集の傍よ

かくゆふま連中もくくふねむ

桃隣

足あとも遠ひすとあくよ雪おま

桃隣

ええ草移へあやまくさ苔

助雙

ねあみ蓋はゆれ、温純あく

穠水

あくじうらまくわすれしよ

方雨

あせぬめ日一けりのみ今朝

宇宙

千句吟うちあひよ多のれ

冬市

快

タ

徒

宿

も 疎 ト 又 発

立

一 文 沿 フ 年 よ 姦

破

抑 今 ム 马 船 捨 ツ 擬 ハ 離

船

シ ヤ ド ヤ ド ハ 通 ハ 云 自

船

シ の 具 魚 ツ て 買 え 烹 食 賣

冬

鼻 オ 仕 ハ も よ い ま す り 持

方

ミ ト 之 唯 名 あ と そ い て 之 の 角 力

毫

ヤ ム 賊 ツ を ト ル ハ 也 お 小

御

ト ハ 丁 ハ 住 ト 塞 岸 の 畑

船

ニ 十 五 の 厄 痘 人 ハ 幸 ハ

亨

ト ハ 事 ハ 諸 も ト ハ あ は せ 船 や 島

想

ト ハ 事 ハ 諸 も ト ハ あ は せ 船 や 島

想

ト ハ 事 ハ 諸 も ト ハ あ は せ 船 や 島

想

ト ハ 事 ハ 諸 も ト ハ あ は せ 船 や 島

想

ト ハ 事 ハ 諸 も ト ハ あ は せ 船 や 島

想

ト ハ 事 ハ 諸 も ト ハ あ は せ 船 や 島

想

ト ハ 事 ハ 諸 も ト ハ あ は せ 船 や 島

想

ト ハ 事 ハ 諸 も ト ハ あ は せ 船 や 島

想

想

故れ山百日紅毛ニ百日  
春盤と柳葉ノ草の鶴  
外通人呼御<sup>ス</sup>氣<sup>ス</sup>  
持<sup>ト</sup>らうゆゑもお刺<sup>トテ</sup>立<sup>ス</sup>  
うりまつゆゑは民<sup>ミン</sup>チ<sup>シ</sup>氣<sup>ス</sup>  
月とちよに毛引<sup>ス</sup>可<sup>ス</sup>  
セツ<sup>ト</sup>大空通<sup>ス</sup>確<sup>ク</sup>音<sup>ス</sup>  
小兒の豚<sup>タカ</sup>と毛引<sup>ス</sup>可<sup>ス</sup>  
箇籠<sup>カガラ</sup>よしとんて賣<sup>ス</sup>是<sup>シ</sup>空<sup>ス</sup>の波<sup>ス</sup>  
因<sup>ス</sup>家<sup>ス</sup>有<sup>ス</sup>一合<sup>ス</sup>引<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>清<sup>ス</sup>  
常<sup>ス</sup>より<sup>ス</sup>新<sup>ス</sup>え清<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>の時<sup>ス</sup>  
毒<sup>ス</sup>毛<sup>ス</sup>匂<sup>ス</sup>よ人<sup>ス</sup>毛<sup>ス</sup>

あまくよろひの有りや 宿貴仲  
御印をうらう生垣 美濃  
と迎送牛小牛等  
手引ぬゆる邊りおもはる等般  
ゆもむ松奈公もすの月  
鶴 国からへる扇 痘くわ  
さきま斬れ黒トリのアツ  
詔み元をも拂まいしよ  
誰敵より脚の用も乞  
向 いへそひへそけの事  
殺やらず姐流可破ほ小  
鶴 郡  
ニふりぬ寄らやくとぞ  
等般  
通事ぬくに付地等  
月當お前のみゆ 一休  
やけく控えぬもの羽幕 美濃  
人計の往やまくらんとむ拂  
まもむし 放縛め版  
等般

三吟

唯一つきりといへるにれ  
涼みのゆゑの五紙（ハシナ）をも  
ねまた拿洋紙（ハシナシ）をもひらいて  
ひく音波設く兩の大粒  
詩月と羊う風（ヒス）宿（スル）は  
作りた鶴毛釋（スル）と振舞（スル）  
百萬（ヒカル）の小毛毛辰（ヒムシ）のあくび  
ちか純太進（スル）と小偏（スル）も  
細風塵（スル）の無（スル）投（スル）  
小ちうしりとよやく判（スル）四  
ね去（スル）とし伐（スル）神（スル）井（スル）  
年（スル）あきとゆく人（スル）家（スル）  
暮（スル）縦（ハツ）と横（ハツ）の爲所（スル）連  
路（スル）死（スル）持（スル）まもるよるる家（スル）  
威（スル）の印（スル）、ぬ酒（スル）も

和洋人拌。客ノト成  
服多門にて居テ多奇也  
一處ノハ居テ火至ル如  
ナシテ多モ油筋粉物に成  
モトハ油雪ガリラ離レ  
麻ガタナム割先の門調  
ノコノ御の板ナリカニ申  
牌ノハ油煙氣鼻モ莉製  
大モハ季子約鴉酒也。言ナ  
赤子年暮レノ人ノ病也  
室房仰頭。仰首や冥々ん  
茶好ゆハ油配。桂ノ四  
汗毛ノノ事仕合不下。紙ナ  
胡ナリ。油絃と本向洋ガス  
早モ秋水も油腰也。毛モ  
中衣也。拂ノ。惟才媒作  
足底ノト点つて。身ノトも  
病癪病也。形也。而

あ川匂ひも涙すふすひ

戎

こまくさり黒ハタ六月の種

粒

### 冬部

葉細く多葉小葉有る  
松子

あくべつ落葉樹アカベツ

立志

さうゆつサウユツ有る

調和

青けり風セイケリ吹くや  
立夏

举白

含緋と梅とまだや大班オバン

無倫

あ紅アヒンと梅とまだや大班オバン

神叔

徳活トクハクの音や  
立春

立暦

徳引トクイ経去ヨリム水ミズにしきれ

立晴

寡オハシのれを語ハシ

ひそきえと漏ヒソキエト漏ヒソキト

不角

さくらサクラおもよ葉モモイロもみゆき

素秋

あ冬アツメの音や  
立冬リツメイの音ノイ

大坂月尋

あそくへ草庵をあさり  
ちりわらひのむかとよめ下ト 深川  
早川のむかひのむかし下  
放めりゆくゆくすま、ゆゑす  
ちらりとかく刻み、ゆび  
あくすやあんじよもとせ  
湖の立草庵にて枯木下  
木色ぬねいをくくと内多ト 竜  
流霞

草庵の歌合

本松や十人ともうちをうがり  
大井の荒蹊サカ おけぬ 金糸  
波急めじよをじよや野水  
湖はるく裏を脱ぐわ細代音 同  
高岡寺奥森田 ほりや高岡寺 備意  
神ちく姿つまく 五桂子 韶  
冬川や月の浦て流る  
名はかなれぬとしを 蝉歌  
室を事もらひがつよむ柳堂 横堂

和風の事はうらやましく思ふ  
うと氣をひく

波中うらや津絶えや富士の晴

櫻春

リ隊

神宮へ年次祭の乃木大  
花わづきすすむ稚鷹が霞ト  
身立あかねーおひそめ若リ  
梅の尾や多幸萬阿の新城子  
笠  
川流や柳の風入るに  
冬市

金指貫が山へらぬ歌や村前  
舞鄙

太津尚白亭

山の風の音や草の香り  
蝶  
蝶屏に鳥の聲や舞子下  
立  
や小田原へとさす  
美の山や雪の流てゆる様  
羽黒山  
吉雄  
序令  
全  
呂曼

葱シニカヅラ  
ミノ斧

彦御ノ彦至モウスハ獨活 風調

名義

葱枯れノアガリアケシ

脚互

性食松葉子

ロ切ノ子賀多塵脚トリル

雜陳

由比つ辯

人仰弓張合アヤハツモ

同

葱の茎の葉の葉や蝶の葉 同

猪耳麻浦

ナキノアガリアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナ

同

睡やアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナ

止水

ロ切やアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナ

麌士

少名アカヒナアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナ

立安

ナ月アカヒナアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナ

志言

称布川のアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナ

畜

寛もアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナアカヒナ

等著

波あさりや草堂の事と笠  
弓の弓と矢の事と笠  
曲がりよかめりや羽の弓  
ゆゆあつれすがくもむだ  
風の吹きに心の隨ひト  
拿のこに匱きらぬをナト  
あまやきくわくの御所江  
舟船や相模富士山の鳥  
彦三郎は新宿の下りりわ  
蓬山  
らんと陽は日出の紙がれ  
石の巖の住處やそと用  
牛の下の多井柳山の下  
あらうるやえぬ井河  
はちの縁や松わ送り山と呼  
堤亭  
山夕  
鶴  
宿  
真義  
毫  
う安  
まくよみ仰きのねきナト  
雪の夜や刀の柄よ小地打  
松

安ノノリノハタシノタミ

牧豎

トヨタマヒヤミタマニ通ヘテナリ清キの向  
合がくくをあひ牛ヒトダツヘタクシタ

ハタモカヒタマツタマスモカヒタマス

冬部終

之保ニ已三月十七日芭蕉翁より脚手室を  
霧籠ノ森ノ門屋の曾良き長途の天。ばと  
かと往とあとね鴻媒山と峰とれせし内  
半ハ湯殿山諸山間の山と九十里の芭翁  
二三日よれりと秋もとす——らむ  
思ひて丁ハテ瀬越中よメタキアリア海  
御家ノ汝道の松月とたまくと後序  
わと人是が所とく矣晏めとおとわと  
敷貧とわせがとく汝也と色も体もと達官  
あや——　始めとみり別生め林子  
こうれ伊留よお果を渡よ又拂水よと  
歸る志乃の後きに舟半門とゆき

内而之、ひまむかし。又、みくらとすら、  
まきこましも、扇と古つた。あとの十月下旬  
事、まよぬよ、教出く作と、旅、宿あり教下  
じ吟りて、深川の草麻と聞む。うつり  
門と歌ふ。和也、かひつうと、宿と  
あそむこちく、用送もあむ。和也  
むるこのうどんりを、やどりき。年  
をゆく。ふ成五月、ほけ御と西廻り。  
まくと、長保とある。是と、じく、塵とみの  
はれと、ひづれ、別人の細もすし。あはれ、  
はまどちの、前途、むれ、と、名風川  
よ、まわが二所牛の金段別角、御も、年  
よ、まつともとあひぬまうと、まわすと、  
篠の内、まわ離別とて、扇と、まきこ  
まの、色と力、まげし別ト、りて、尾数荷弓。  
宅ト行と入せまはる。代かく、小田のり扇、  
とりの、竟界と、立候。唯一生と扇と、の立候  
て、極定と、まよはる。五十もの、夢枯野、  
老々と、見る。其角やもあしく、枯尾だ。  
龍と虎と、百十日、義濃如行一集を、後、一月  
うち、嵐雪、夢人の、旅を、ほろと、納屋かと  
あらぶあよ、一句と、ほ段今と、三回忘已の

おじてアリモテ之を徳丸子ニ月ナセ日未江を  
度メ立ツケ國ム内に河を文月ノ旬ニ越メ凡  
セ百里のり御色毛と白草原ノ山の嶮行  
懐言本所領い事ナハ所思ヤモリナリ難と  
慕メシモト紀行の文、奥ハ細通といつ  
物。一岸已唯名古跡の廻路をもす  
修ムモアヌルノ限ノ生原ノ程の人  
たアマカシ色。

首途

崇隣稿

内山

善ノ一品

董瓶

仰アムヒ行德より川無木舟(ミタマ)リテモサク  
役久ヘテシ一里行て十丁の手添麻鴻の善袁海をエ  
建神氣ニ二十四丁

善袁 株の丸本

樓門

内外、竜神六軒

本社

蜀王城の鬼門と守護才一也

春日 志賀一軒

○ 奉納 謾カツハ掃やニシムニシムの聲

モアラサニ事 空を行て御事シ

奥院 王室の掌 音詳るソエ事不叶シ

神極

御墨石要石也 よど竹者モひ石の指と極

遠御の山の数々トリ吉凶と知

○ 長宗成川代乃湯やか札め石  
川手洗を吟咏 山奥すまわ川

見目の珠

岩乃宮

鄉宝藏

高天原

神軍の跡

歎味方城有

済物志

佐瀬ハ赤宮 加茂ハ毘院

香取深例丙那共ニ鹿鳴ヨリ三里

麻治ヨリ出ヘ隣ヲ行ハ名ねノ松有

鹿治

ミテ玉造ヘ出小川ヘ通ヘシ間ニ

霞山

霞の浦

アリ星ヨリ能波ヘ順

能波蘿

十一面觀音

門外不動ノ濡佛

又北の川

紫峯ヨリ流き度

禪定

兩山男隸女躰 紫小社サハ社

蘿ヨリニ

星登ヘカニメ 雜所宗源 宗の主爲

千尋の谷

春夏の中巔、巖窟五軒、魚肉酒

禁断

馬耳峯の間十丁余百頂上ニ登

西方ヒアラムニ眺望不斜

右内外靈山の奇勝

○ 古浦の至りよりとて能波山

○ 能波松下にて轉スツ有

岸ノリ山の細道アリ

稚尾山 西光寺 千尊 薩摩

勅願所

アリ山の山頂ノ御堂也

よりあれ

○赤松の本丸や 玉高雲の巻  
一里行て 横川明神アリ もぐのなみに  
い川下 墓石橋御行ハシノミコト 小寒兼高館則  
小寒村ミツムラ 旅人泊

○波能の烟ハスモ 横川  
是ヨリ宇津宮ウツノミコトへ出ハシル日光山

所山ハマツカ 寒月連クモツル 神橋ミツブ 小青鷺コシロ

御祭禮 胤月十七日東照宮九月十七日日光宮  
石イシ 杖表カタハシ 二王門 御馬屋 御水屋 輸藏  
上御藏 中御藏 下御藏 赤銅アカタケ 丹衣タマエ 御殿ミツタニ  
鼓樓 鐘樓 檜鐘 朝鮮チャオセン ヨリ 獻上 大灯

同断 陽明門外矢大臣内水天 烟樓 神樂

神樂舍

護摩堂

唐門

御亭社

御廟上ノ山有

御平地堂

後ニ

赤銅アカタケ 双林塔 三佛堂 常行堂 賴朝堂

奉玄權現

○東照官奉納 金鳥お舞ヒナギン トテ事向

滌尾推瀬

中宮 三亭松

鉢塔

普賢

子種石

井伊サ將送官

御手洗石天神八幡

別所

中宮別所

日光三石照燃キヤル俸賞

手木アリ

ヤンニシノ剣 無雲寺御岩上ニ石不動立

日光坊中墓所

骨堂盤石ヲ切接髮骨ヲ納

中禪寺 日光ヨリ三里登ル馬返迄二里上一里ハ  
羅刹巖ニ 摩限堂 立木觀音 年石  
神子石 不動坂 清瀧 湖水

黒髮山 則山耶シ 三四月とも雪降

○ そもそとくす湖水より草木行すと毎  
○ 鹿毛モ一例ホテロスミテ行スミト  
○ 宮あるとよアツクシの腰を折

寂光寺 日光ヨリ一里半尊 寺妙天外ニ  
権現堂 人のみアリ御名

○ 今年の脚小萬あんともー  
げ所を羊里廻リ又奥山へ入り日光  
四十ハ湖の中す一地脚あんと遠

山と空山とアソボキは十丈余碧潭  
ノ底幅き二丈一トアマカニ窓アリ肇  
メテ御めうとスル所シミの脚あ  
リアホホの音空山によ樹林ーとすと  
夜鶯

夜鶯

○ 雪山や落葉の風の音の音とて  
日光ヨリ今市へ出る高原へかくま  
ねにの黒羽山あら山野よ色葉門人  
もく身入

即月朝日兩

○ 物身よ会羽やすまの更衣  
もく身入あら山野よ色葉門人

○ 年々よ外様よ病ししもんの刺  
そくしりほのうかくら

○ 止めのめぐらすよりよもせ  
りて難近津守お雪ふるる  
望り無り

○ 痘とての歎あやうれ  
興市宗高氏神 八幡宮を館ヨリ程近  
高野新誓 一にて扇的と射てとづく  
感無殊増てまうりよ

○ 叩首や扇と笄い日<sup>ノ</sup>  
玉藻の社 稲荷宮 山形わはの藤原  
大進<sup>ミツ</sup>の跡<sup>ミツ</sup> 駕<sup>カ</sup>も一里計行

○ ほふ あひ下やくもひ照に山桂

黒羽八景の中

○ 鶴色とあけとくアセモ高川

○ 夏の月獨物<sup>ハタケ</sup> 一飯綿山

○ 三ねや先白四の述訃

○ 落<sup>ハシ</sup>るハ陰のまよ夜三月

行者臺<sup>ハシ</sup>宿

○ もよき<sup>ハシ</sup>玉巻焉や<sup>ハシ</sup>九折

留別

○ 山峰の海<sup>ハシ</sup>本<sup>ハシ</sup>白牡牛

船<sup>ハシ</sup>温泉 黒羽ヨリ 六星金 湯糞五ツ

兩町<sup>ハシ</sup>間ニアリ

權現<sup>ハシ</sup>八幡一社ニ巍<sup>ハシ</sup>

林原ニ聖觀音

八幡 宝物 宗高扇 漆鑄

墨目

乙亥 九岐ノ鹿角 溫泉アリト人ニ告タル鹿ニ  
主護ヨリ奉納ノ笠外ニ縁記アリ

殺生石山山間刻レ残リトモとアリシイ元  
七尺四方高ナリ西ニ余色赤黒一鳥獸生  
リ懸リシナシシテ如ヒ朝ニ至リハ行達  
人モ預可御シトナリ西方ニ固て往人不入  
邊の草木不育毒ナシシテ

○ 美モヤ石と柳ト、立木

ヒ耶ウヒヒ白河より、孟紙扇の掛リ

狹鷲 猛ウ風ありシ山ニ於山 何故  
吹送シ是も風也ヘ登ル峯ニ聖觀音  
聖武皇帝勅願成願山 滿願寺 僧の  
書院トナリアハ白河より、白河寺一の堂也

○ 豊かな風一四力ナリ喉を塞ガシ  
ヒ耶ウヒヒの音アリトキテ三十丁ナリシ脚下へ  
出閣を御ス

○ 守教トシヤモミホアリテ御云

阿武隈川ハ白川町の東流也ハ奥みぬ(麻子)  
板橋百間余早ニ馬除アリ 猛也ニ留メテアシモ  
氣流 白河と白川の間を隔テ(波ナ川ヨリニテセシ)  
波ナ川は一里股 右川の源アリ 幅百間余

高ナ三丈よ近ノ無双ノ川俺庭ノハドヨ

乃シテ丹列あすみトシタシム

○比モ玄鶴ノリキモシカシ

家ナラ石川の姫ヘアミ一辯 謂士アリ  
か内席扁 美城ヘ山越ニ通ルヒ道ノ御  
非限トシ萬石自由馬不備官不備立寄  
御之江臺モ野一、夜の洞より馬ヘ出シ  
小名渡ヘアリテ御先海平岡ヘ所モ  
東海と後モ出辨ノマヌケ仲ヘ繩和  
族ヘ既モ篠陸の人あ滿モ空石也而  
半馬ノリ石とセシム

○初體とテアリ可ミ小木の傍

げ朝ガ行テ故郷舊野田玉川 玉乃石  
ハツモ因モロミ古人の教と引合てらつて  
海辺ヨリひすりとあるキタリ感と便す

○獨リサモ路をぬりて獨リ

松毛ノキノ木も玉川の由辨

少木傍ヨリ二里もく湯キアリ山、檜洞臺  
村ノ町家溫泉數五十ニ家ノ内ノ  
多シ勝也能作手自由レバ近間トシ族人  
名給山原半里也く白水ト云ふアリ海送  
ヨリ十六丁石ヘア 阿蘇院臺則平泉寺臺の  
寫——秀衡妹徳尼序前建立奥院  
弘法大師 むせん禁制

先瀬山 千手觀音、殊生山 麋音石  
ゆきし此所、田舎ありとやいつかの津  
見ゆ

也

城下より二坂れへ八里行きて奥通  
日和田へ出る所四丁行てた鴻右の方より  
御臺山 南都若艸山の付有高有山とは  
そぞくより巍峨より後主を治めた貴殿  
登して入て徑アリ 案ヨリ巍三テ四十三間  
禁ノ廻一貳百六十八間

○みねゆりと志ねん山を看

山ヨリ未申ノ方より案す惟子と云村  
案山深 山井もびき殿の根アリ岸

をもぐりゆく

○山井を覗けと差入殿役ア  
は香山に田島山やからかつて草 岩原  
ひままであらすじあやうりあわといひ義就かと  
りひ故ノキナハ 高庸地と云ひ是よ  
あり

ニキ松浦下野マ一カミモ鬼井町一チ半里  
竹武隈山川鷹ノ渡黒隈もとも田畠シ  
けめらとてああと云ふ

○塚もろ今も薦すの麦畠

福橘もろ山川へ一里山中もり木隈川の  
流アリと云ふもとカミモ谷間アリ

文字榜の名を石のさくらん記ノイ  
又そぞりいつみけつ逆すも轉爲今之文字  
乃ちトは成石の裏をそくと扇くぐんと  
さくと一丈五寸幅七八分余續の丸左  
とそくと圓い形の円下に松ニキサ桂  
傍のゆづりた經跡を金墨ス右の宮内  
廊の海たへせし所扇二十丁也

○文字榜の名の幅かん扇が  
一里行たる方徑より佐多野と云ふ二里を入  
福島え山醫王寺 宝物品三有守アリ  
義經の笈 木慶と云ふ大盤もアリ  
作友彦曰く此を山城海アリ 南殿様

兵の軍 是あれの舟と云ふ同墓前一門石塔

次信 忠信石塔有

○是れ井の名を松原 やねも  
け所ヨリ板坂へ出奥海を桑折へせきをヨリ  
坂田村へかゝ可町をも離くたり(二丁入  
義經腰掛ねまば葉八方よきばの半  
也)つまおまも宜よ身く十間四方あり  
うちもえ萬の重みて千歳の経し皆本屋  
竹ひうげ

○辛清と雲石とはいたほの船  
経塚山は本もあく又海たへゆく 北元山

シテシテえに連のあも戸指まし  
是ヨリツ川村入ヲ經折リ家アリ一躋三  
の細石こか行て左のあは寺山が多キ不  
堂一字波信忠信兩妻軍主の波アリテ  
相双山より外モ半尋折

○軍ウニヘル地也至也

是ヨリ右石城下山と刈田の間西界方よ  
カシレ子アリ山中高の除左ニ丁  
金ノ泉ヨリ宮山へ左を擣り除左ニ丁  
入ケ竹約四付アリ社ヨリ乾の事ヘ一丁  
行ケ武隈のねアリねキニ木に  
挂サキ萬葉アリはぐくみり西行の源

松ノ木山跡也アリとあれど萬葉の植絆  
也

○武隈の木山御殿名ト涼

宮山と一里行て一村を左の角ヨリ一里半  
より右入テ宮山山あらわすを左を經御  
御壁アリ御の者旅人多行る所也  
うしろよ原も立木の牛將の像アリ  
立傳所廟もあらわすと傳々仰ゆ  
右も山馬の跡也

西行

行ともきぬの山もアリと傳る事  
かきよもまくあまくと傳る事  
○言のまや和也と傳る事

是ヨリ晴田の町中へ引行先へ名取川  
橋を渡るを仙臺 大町並村千調亭より富士

○ 痴はるやゆめと月よりみの西  
色もとりぬふじく寧し

○ 奥多めぬ能を表よとたに西子調

### 鶴年

○ 富浦舊代や陸奥の情す  
喜平山、仙臺城山十九ニノ丸ノ間をもてて  
ひな詰浦野には當國といつて勅撰名前  
集とは名後、高紙野には西江とある

山櫻園 緑遊堂 天神宮 あの下萬師堂  
宮城野 玉田獨野 佐奈傳トヨ一里ニ通し

○ みさしるのみこととアセラヌ  
あかトシテモレトヨタマシテモ  
ヤクツルテナシ田村様アシトモアレ  
ナシシテヨリアセラヌ  
トドケシテハシタマムラ宮地等  
ミタヒヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒ

### 芭蕉の過

上町れの道

神社佛閣寺所多ア略ス

南村木舟は停泊いよし松終をかえり  
あそりあそび、為志ゆりともうひがとも  
ひつぐくよつぐくよつぐくよつぐくよつぐく

いつうらんや神ともあらひ

○後實ぬあをもあれどここ遠ん

○一とおれよ塔ノ山の山少

賀行旅

千詞

○と門をわしと朝若井やはなり  
は野すむ今市けへからくの冠川も橋を渉り  
車えきの旅と二丁行テ宏切新田とお村  
石城の轟子　十音の夏アリ又同所を過の  
田の旅りもありあ耶ナラズ垣経也

峯を波打たる宇をわん

○刈ばり刈まぬ草や一株

方よ小橋三りよ中と詔源ノ橋と云前の者書  
東の橋と名ゆ是より市川村の板橋を  
ゆり右の方小山へ二丁行て

壺乃碑

多賀城鎮守府將軍古館也

神龜ヨリ元禄ニテ千歳ニ近

右大将賴朝

久らのいそとちのいとくとく  
かよつてよけのいへ

盤手

信夫

夷

西

此城神龜元年歲次甲子接察使兼鎮守將  
軍徒山佐上勲四木大野朝臣東人之處里  
也天平宝字六年歲次壬寅參議東海東山  
節度使徒四位上仁部省卿兼接察使鎮守  
將軍藤原惠義朝臣朝薦終造也

天平宝字六年十二月一日

碑之圖 高六尺三寸  
横三尺一寸  
厚一尺

はふすもハ情村へ一里余佃をとも入ハ情村  
百枚の轍は無れ算る之間であるの岩四つへ  
地に氣の者い仲の石と云是ヨリあら松山  
しよへよ海魚アキテ千引の石ひきといつて  
所の者立カレアシ一里行ふね浦海足ヨリ  
垣窓つめた筋かよ浮游跡田玉川を走り鷹  
いつれ血を捨たる旅先に鳥居鳥居古社の御前も  
奥列一の古社とある神前より改號を  
移き林流のくじら山麻屋文治三年和泉二郎  
寄進とも右寺主護持も送信あら  
石橋の早し

○ 法樂 律師序 はあく日め 安井家  
 蔦木町あ町の申よ 垣今つりまの門  
 湾へ せぐハ才高サハ才厚セ可ハ分一ツ吉  
 四人二三うす東方厚武才五分は高さ可  
 多と壁也 一海半へ高さもとと壁也  
 半神 一午るれと名を以林の徑を運  
 一年に一トカレハあたし云今壁も纏

○ 月夜 一千賀お出次いひ物

塔窓宿つあじゆ小室へねづへ湾内海三  
 里左大氣の爲渴をあくす水氣也とて  
 錆けのたわん在どアラヒノドリ所、  
 酒とくそくそくに梓をまき節つづく

あゆの縁のあくとがきの難り後ニモクア  
 トシトス活山住鵬雲和尚法船新經つ湯毛  
 兄佛と人信浦か聞くぬく終中田知る  
 未慶守卓二郎不動君 立本堂の立脅の如本  
 未修河トモ橋二り御く酒  
 旗後是も橋も船もも陸ももあつる  
 長光坂もおよ西行廊 ちりすの門

坐禪堂 石灯翁 南村宗仙寄進  
 背堂ニ地藏 奥院是ニ先佛土人碑銘五  
 鎌倉巨福山建長寺一山和尚筆 しは石  
 治金もとト高一丈一尺横三尺土寸厚一天  
 俗汚無而致生整斬

瑞宮 因福禪寺 妙心寺 東寺 紫衣

ひく 楊宗寺 仙臺城主 善提院

右 陽德院 左 天麟院 仁智院

楊宗寺中ニね鴻根源の墓おきね一キミ

庭 雙極額壳園の筆 方丈の死也

松鴻眺望

五十七鴻 四十八濱 二十二浦 三十一崎

外 金石山 富ノ山

松鴻譯

旅松鴻古枝桑亭一の名所にて丸洞庭  
西湖を西子湖南へ海を以て之に連

三里浙江の湖をもとと鴻の數を

盡して歌とのは天を指め行とが波す爾而  
あくまに二重よかどもあこニ重す事て左手に之を  
ちよげんから扇をひらき扱へあひて火孫もも  
まくつねおみわゆるやうなばゑ汝  
川す波あくまく窟曲をあくまくあくまくと  
其をまく宵御くとて差人より頭を被ふ  
チふ旅伴お者大ふすみのをきくとてや  
送りの天えつまくへ。まばゆいの細を  
まん手にむかひて窓を開ふれば嘗  
み中アラ辰宿もくもくがあらよどく  
ちよげんから扇をひらき

○ 松鴻や鶴や鷺や鳥をわき郭云良

し

○ 桂海や水府の水をも覺る  
聖修や修をあくまでものめ桃源  
助叟○○○○○ 橋や籬うつは遠入ロ 桃隣  
橋ニリ満波流レ 五丈全○ 月一川新老ハ古ハ終ト  
仙紀○ 桂島より平和里へり 這ひ入リて海道  
も羊里計石ノ山とよの山登てスミテ○ 富山大作寺 高泉和尚額アリ はるよりね桂  
雄島より桂へリ 佛し日が下るんれ桂へリ  
死く極む可に御は様に之を活を用すわ  
又活へリ われむたけわく 国主もかく  
登山めぐれ 行人必見カズモ也

○ 豪吟く桂くアリく寫の

○ 行くて石乃巻 は景勝と諸國の廻船を  
見ゆる人深人家富より石乃巻といつてすの  
御子立石名行水也と成る是を巻く者  
とて今も猶すとよきるの巻くはいひぢ  
物とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
○ 旅も春也いづもよ深よふお巻○ 枝山より通航活 ひあらわと袖の風こよち  
乃みよこよよかやくとせよかにそ  
石の巻より一里行て枝山法華不退の通揚  
奥へ千手觀音深入口、高キ峯へ日和山  
愛宕山

金雞山 石の巻ヨリ十三里、舟路より和樂會にて  
陸地の小難所 黑川と云 猶浦より舟路  
三里、里濱と云へ 河アリモカク島ミス  
蘇原ヨリ四十八丁 陸ヨリ三里誰て海中ニアリ  
丸キ塔アリ是も陸奥山 五丁會テ  
大林寺 護摩堂 辨財天 神明龕  
羅現堂 寄愛宕 五丁アリテ 御手洗旱菴  
ヨリ水不絶麁ニテアリテ古鉢の小鼎  
アリヒ小鼎高才貳拾尋 石ノ御ナシ不知  
自六角形テ一角の幅七八尺余也但古七尋  
岩動ニテ各ニ底埋半見アリ方却經久  
石故室ハ松板の寄生松並連シ石は  
嘉慶ノ先石明也識靈山御守御もの  
一物ニ國寶一枚珍宝末代の記念  
こかひふとくとくあまきよひひわくとく  
嘉慶ノ年号あるくあるくとくとく  
全周ノヘリ御禁を禁む御守御所アリ  
皆御禁御無れ御守御所アリ御守御所アリ  
金砂灘漂泊黒雲アリテ是と  
ナシル波と考キモ七宝の一物  
金生木の板あるやアリモカク島  
モ既と唔まし立アリの時分ナキ

冷れ輕一色にもとす等一壁

まうこのまゝ了り夏とえわくも

あひひをかくやうの

○門もはや暮とあゆく金毘山

○薺林のむや、そんこめ等、所

○小島や涼——ふ風と送日澄

是より右へ左筋つば石のみをへ廻り和紙

新田へからしひ水を離くら籠の大門

アリ平泉ヨリ五里もか城郭、急拵ナリ

が行テ一ノ國是ヨリ 高館 平泉

義経像堂一宇、毎慶様 中尊寺入口言

龜井、つね田の仲ニタ 小工川 衣川

夜の間 開山 金雞山 和泉城、古ノ開ヨリ

立丁西南ニアタリ、一方へ隆三方へ衣川也

弘名壽院 中尊寺、東巖山末寺 當住

淨心院 當寺、慈寛大師 開基 貞觀

四年 え縁九三テ 八百八十五年ニ成 金堂

光堂是三間四面七宝莊嚴ノ卷柱

合天井 黃金ヲ彩、鷗鳥十色ヲ競其結講

言詔ニ絶タリ 唯扉ヲ閑ケハ日月ノ光明名詩

本尊祇迦、秀衡三代ノ廟 堂ノ下ニ體ヲ

納、經堂本尊文珠 一切經二通

絹絆金汎 宝物 水晶ノ生玉、童ノ月歯

秀衡太刀 義経切腹九寸立

白山権現

藥師堂

八幡宮

燒於十五鹿

以外右跡多レ中尊寺ヨリ裏内までハ不叶

○金堂や法事も行可達のを

田舎者つるり 河原や夜川

○軍やん力じとてすむらひも

○虹吟くゆきくつ浦 細井

是ヨリ遼谷<sup>タツコツ</sup>巖向<sup>イワカミ</sup>深ア十間全アリ  
一洞ニ一階堂八間ニ五間し又ノ一門天  
安<sup>ス</sup>不<sup>ス</sup>剝須<sup>テ</sup>入大同ニ辛田村九  
達<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>紀<sup>ス</sup>所<sup>ス</sup>高山幽谷<sup>タケシマ</sup>にて  
人稀<sup>ス</sup>多<sup>ム</sup>去<sup>ム</sup>いはか鬼<sup>ス</sup>怪<sup>ス</sup>怪<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>尋  
ひ<sup>ス</sup>通<sup>ス</sup>雙<sup>ス</sup>見<sup>ス</sup>自<sup>ス</sup>と云<sup>ス</sup>又

一ノ開通り 金成村へ出る山村一里脇<sup>ス</sup>  
はくも橋アリ

梶原平次兼高

陸奥より舞<sup>ス</sup>其<sup>ス</sup>に<sup>ス</sup>も橋

アリ則<sup>シ</sup>毛栗<sup>ス</sup>と云 宮野 飯館

高清水 佐<sup>ス</sup>家<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>其<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>家<sup>ス</sup>

西小ニアタリ 朽木橋アリ 雪駄山則  
佐<sup>ス</sup>郊<sup>ス</sup>ノ<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>其<sup>ス</sup>わ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>其<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>峯<sup>ス</sup>

少<sup>ス</sup>月<sup>ス</sup>の雪<sup>ス</sup>白<sup>ス</sup>

○朴あれ葉<sup>ス</sup>や<sup>ス</sup>その<sup>ス</sup>た涼  
古川<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>宿<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>あくち<sup>ス</sup>其<sup>ス</sup>歩<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>み<sup>ス</sup>アリ

日記一宿

三

○署よりや休農業不止め  
故郷鶴は山川の町中ニアリは鶴の名、家  
かこにあらかじめとて山川ハシマリ行も整  
木立也。山川をゆく者鳥多き村へがさ  
小町山アリ。但書為寺をたまに中納  
庭房卿。西行法師兩説より當圓公と云  
髑體カノ説ハ當圓八十鶴と云ひ傳承云  
不知。○宣教院の裏ヤタリノ塚の上  
是より來るべからず。磐梯山則博下の  
久といどその開け不わざと

○為家の山松白ノノ磐梯山

山前よりト密と云む村へあらずたゞの源流後は山間ニ  
小河備山のすゝはアリ是ヨリ岐多の源流  
奈ニ大川源流。般十つれの御。是山也。  
岩支ヨリ山門山門向。山前と云村アリ  
則ち山門の東山門と云ひ。守山一郎ハ  
毎夜うとうと。山門ニあらそり坂多小石も  
新店への旅通し屢あり。馬足不至人馬絶え  
アリ。米穀常々不自由別ら飢渴の  
折良宿不傍丁食物也。一宵下通  
計ニあらず。御食暮開封ニテ多く捨れと  
尋ねキトウ一宿也ス

五

主

山路塗

○ おをぬけしよ谷と源すの焉燒  
○ 瓢原ノも山城と力こつ井  
足ノ尾をほりからとひを拂んともした  
人南へ方面をと一つに大石田へゆく  
如賀原亭へ体をすまし田のま  
会を求下る者多く彼家上川園及ちわ  
七川幅廣く小早へた右乃山後  
流敷多アリ中でも白糸の所す  
よしれども川筋坂田と二十一里川の  
中船岡四ヶ所アリも大石田宿とわや  
右乃山へあく入る能く経きく

ちよほ 信木右口 清川 はくすき  
○ 經兵と二十里宿より宿上川  
○ ちよあみ原やらむたとろさん  
坂田の合 神の浦 あみ河原  
○ 萩原ノはまそりゆのり神の浦  
○ うれせむや浜田の久松家  
ちよすわ家は行ながくおとく筋跡  
すむか山路を角を臨牛馬不通半弓  
狭狭いうちのあづをとれくて野原  
行きさうすわ

蜘蛛眺望

東島海山

小島の数七八

町の末板橋の下立木潮の揚げ落葉滿干毎  
年写の爲要也 皇宫山 干滿珠寺 頤月舟筆  
鐘樓山 西行場 閻子堂 骨堂 袖御堂是也  
阿弥陀堂 觀音堂 雜佛堂 赤坂普賢堂 十王堂  
冠石 神明腰掛石 兩玉山光岩寺 山巓峰寺  
青塚 岩宮 塔崎 物見山 舳署八幡熊野堂  
二堂 三石 堤留 鯨濱 稲賀崎 鷺崎 大石  
伊佐野神山 火灯山 烏石 上白山 森向 高嶋  
弁天 下島 海人森 大麻渡 唐便山 十二森  
僧當 男写 女写 腰長 合歡木 大師崎  
八騎濱 女麻傍 睽鳩巖 ハツ嶋 弘因島  
李清翁写 あらもす感性深其併彷彿たり

後園十二景の景一至二は二事に限る

○ さくらんや唐とうりゆ夏梅  
鶴角より歸れ 石の上にあひ心

芭蕉の供え札多見もせゆるまで

○ 波こきみ葉すや つけしみきこ葉  
け下すわちみをあと坂田の處むけすわ 連枝  
あわせ取返筋へ傾く 一里知らずやしよめ  
開アリ 事無事 大國無名跡の事と奥跡よ  
アリトシくさりかうやしよめ

○ うやしよのまやしよく思へ紳

坂田より羽里山へかくる葉よ 手向町 旅人舍アリ  
芭蕉門へ圖子呂丸辻 謹士アリ四年秋

洛の去る所ぬ其不為アと尋入ル亡跡ノアリナ  
相続アリテ被災後是日初窺アリ  
佛面被の内す今は也れトシテアリムヘモた  
はよむれ、ヨリモカシカトシテアリハ後ウタの  
能詠みノルニキア筋の力アモリヨリ行ら  
足手、之傍山を西んと坐を志すアリ  
庵のわきまよヒシテモアシタリト云松  
ふゑレシヨリト云松名ハ義子也モシテアリ  
班竹の木名御流山也、うれどもアリト云  
○ 村と石も木もあくわくと夜坐爾那屏  
音をいき渡のうふ寫 露若

朝力班竹庭モ引、モリ 則堂

章「わまくし元にレ何  
十古來おえ神もちの瀧 耶叟  
萬ももと織、通了歎 善提  
右一巻モテテ靈前は傳、彼是もハア  
仰顎の歌と充ひ叶すよセリテ御  
本意也ア、師の信と感モテア人じ  
たと於テ已因士勵トシ

羽黒ヨリ庄内経ケ同ヘニ里也城下近ノ行水  
梵字川レム水ミ、湯殿山

○ 最后身も潔白ヨ梵字川

六月十五日ハ羽黒山幸れニ所經地神輿御出  
鉢幡傘鉢計ニテ境内一丁計四

其後卒仕へてまことに法くみを制謂ふす  
トヤ迎歸奉テ詣ス

○五十間佛を抱きのよつり

○吹螺す本丸の蟻も止む

手向町より神奈川下石川階半途は横川  
に不ふる近籠をとる處の間より御兵  
主の角まくらかく動の橋を西行檜木行  
乃殊教の音、即欲想偶の音と見え  
道より人れそ立重の塔足、塔ヶ園城主遠主  
より別當の君王寺高山の源と傳く。故れ  
より一揮仰慕り又は乃守同院后南谷  
ノ庵室仰呑の用小吉源を傳く。又え則る

二三卷の四

○もす日源の近所也。南谷

湯殿之名す。簷を傾て山の面に山に傍て  
雪の巔年一の肩と云む者一宮

早天湯殿奥院へ詣ス諸國の多病家疾よ  
滿と懸念併へ方四十里川よ運ひけりうね  
雪吹く人の面アリ。其成是とは事二万

四千二百具

折御山に靈蹟ありやにて祐祐のすつ也  
檢察の筆天とてのよし。雪の多い事。盤  
の枝をとくえニ。此の水塔洞よちくと。根  
升の跡の付とあす樹をばりゆく事よ

穿り草の土中より薙瘞ススとすと全曉  
内のシテ、兩柱櫛のみ臺地の奇勝  
人々、跡蹕の歎カタマリめ、一か所では  
年々、思メとかくさうがよ、立タチてて  
雲梯クモヒキ、舟渡ボウドをも千品語チヒンゴ、まよ所  
いよし、遊ルき、むつとも山中ヤマノ

○大汗タハラの跡カツ、内シテ

曾カミれをアリ。

○御宿ミサカ、せとみの、わ國ワカニの院  
登アリり、ゆるムラり、けじの、登アリ、口ロをアリ  
セに、もよえモヨエと、あり、めり、民ヒトをアリ、

廻アリ、とアリ、かく、とアリ、城シタ、  
げ跡アリ、大丁オトコ、キトセ山キトセヤマ、ね、一色  
あリて、山ヤマ、渓ケン、谷ヤマ、禁ヘシ、大日堂、大佛堂  
渡アリ、の、禁ヘシ、晚鐘寺、燒ヤハラ、實ヒツ、あ、中將ナカマサ、の、墓  
所アリ、佛系ボクセイ、の、経碑キヨヒ、とアリ、

當山タカヤマ、用基ヨウキ、右中將ヨウジヤウ、位下イシタ、先孝善等

めぐらの、ね、ほ、ち、あ、と、ち、と、や、と、よ、め、と、  
いつの、ひ、の、ね、ほ、く、せ、く、と、と、と、と、川  
も、く、ほ、く、村、の、中、と、わ、流、あ、と、と、と、と、山、お、替、と、

○林ハラ、う、ね、草、ゆ、つ、と、観、い

宿スル、市

○野ノも、家アリ、う、と、雨ハ、あ、み、の、ま

宝珠山 阿所川院 立石寺 諏ノ瀬山寺と云

城下ヨリ三里 慈観大師開基 山頂上ヨリ曲洞ノ  
立石碧落ト名テ 雲頭ヲ踏ム 滾羅百折ノ  
靈地仍立名寺と名け給フ

對面石文殊堂 薬師堂

昆沙門天傳教大師

金銅觀音

是ニ主護義光朝臣寄進也 清和天皇御廟

三王權現 三月廿日參禮迎歸民神

常行念佛堂

本尊弥陀 御手洗 則阿所川

御枕石 真似大師

鄉手御石 無量佛半途二十王

圓院

三十番神十羅刹女

獨鉛水 骨堂 宝藏胎内僧

十王堂 祓迦堂

仰ノ松 痣覺堂 経堂 五丈堂

白山堂

地藏堂 不動堂 十八坊 天狗岩

夕子川

○○○○○用事や参りも入へ禪坐も 色蓮

○○○○○山宇や人達めくろもつづ

江紀

○○○○○山宇やまもね後あとも皆も山

風仙

山宇も山宇を珍くゆのあくせくも山行と

岡村の宮下 兼不動 堂宇の事とすくはゆ

施スハツメテ山行通一尺の内よ堂建立らんと

誓へて良やと其初からた年よ難の事すも

而やめりと大願しれ くゆぬ角お柱も崖

よ連て岩と附今スルヒヨの角を雙づ

先重里よ立くまづく 俊吉の頃に移

久して京へ早川と組立るる家の高八十丈余

横二首文余は其のま駄物足と眉膽を勧ス  
是をじや後（あく）事行（ことおこ）すもク 田村  
所ふつすト一休

仙翁領官鴻の件もわ黄金天神のえ縁渓又  
引上ケ不思儀の事もいわば而へ度（わた）れ  
則朝日山法因寺は毎置（おき）て急の所事當  
諸人奉て詣（まい）て所（ところ）をすゝめ難  
志ス寧（やす）むありとある土堵（はづ）のほ津（つ）人（ひと）心  
木（き）和（わ）か（か）こと作（つく）じ感（かん）通（つう）めり（め）るに（に）  
うのうづくわ農業（のうぎょう）文筆（ぶんひつ）お脇（わき）  
業（わざ）行（おこ）るのみ

### 天神社造立年

○石窓（いしむろ）兩（りょう）止（とど）き（とど）き

治川（じがわ）二宿（じゆく）等（とう）躬（みじめ）とあ今（いま）一毛（いつめ）漏（あ）ぬ

民（みん）休（くい）宿（しゆく）官（かん）へ金（かな）絹（きぬ）治田（じた）市（いち）秀（ひで）陳（ちん）饗（こう）應（おこな）

○文刀（ぶんとう）神（かみ）之（の）傳（つら）研（とが）ら

又（また）ゆ（ゆ）白（しら）河（ごう）と（と）め（め）

○ちく（ちく）命（めい）の命（めい）園（えん）を（を）廻（まわ）り

身（み）押（お）し 芦（よし）野（の）入（い）口（ぐち）一（いっ）丁（ぢ）右（う）へ行（ゆ）田（た）お（お）畔（はん）

石（いし）は（は）れ（れ）る（る）

○枯（か）暑（し）者（じ）（いつま）草（くさ）む（む）耕（う）む

同（どう）所（しょ）家（か）中（なか）起（おこ）碑（ひ）無（な）き

嘉（か）慶（けい）川（がわ）庚（こう）申（し）年（ねん）治（じ）今（いま）

○ 沢所近ノ病ノハシヒム林と庚申  
宇摩宮へかゝリ社殿ト金堂ト御前ノ額日光宮と  
書リニ荒地連続シモトトク也

○ 金脱シミミ窓掩リ一室不

小少ニ富スセタガ瓦トカマレト骨もサ雲紅葉  
の煙シ不毛シテ直角トシテ月と尺水を  
氣取シカナヘ富ムトニシモ此れ年半

織山主君ヘ間々レレシテモトモアラム

○ 又都々入るやセ日ノ河

御まつりシテ御子のまえひのき錦と  
毛々編綬の袖ヒ蘿シ觀音ノ詣ス

○ 玄門とテ御集シモトモアラム

草麻ハコニ御破モテテ御物ハ重テ  
絆ヒ開ヒ

○ 壁紙モ無シテ御物ヒ無マシ

子仲  
林中向

とせらひをへり、折脚ぢやみちめやく  
の徳と珍り、風雲流しのゆと  
ちよくまくよもよももて、今世を  
勧め。他世をめぢやうるを機  
すとうちわとふけの世人を  
武陽の鹿鳴子也。すうじかたはよ  
鹿鳴子也へとひづれとをもひす  
まくらひのゆきとタを咲あヌと  
いづくしな鳴のえ、すくよせアスや  
歌すく（スル）あくまく（スル）えもひ  
ねまついつくあくまく（スル）ね鳴た寝の  
わくもくもく（スル）あくまく（スル）

海士乃約年と仰。くるむよひ  
まよともひよひよきびと仰れとたば  
まよともひよひよきびと仰れとたば  
もよともひよひよきびと仰れと實事め  
傳のゆきとれととれはきとね  
れまくらすくとくよ。ぬのの風

時是え縁せ九八年秋、月望よ

ちよよちよ

素堂

かまく

京寺町二條上町

井筒屋庄兵衛

江戸石町十軒店

西村序兵衛

一發勺百六十六枚銀一月拾勺具角一匁立志  
一月拾勺難以  
了姑

一月五勺舉白一月九勺貴重

